

令和 5 年 5 月 29 日現在

機関番号：34605

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K17609

研究課題名（和文）重症心身障害児における愛着形成に焦点をあてた在宅支援モデルの構築

研究課題名（英文）development of a home care support model focusing on attachment formation in children with severe motor and intellectual disabilities

研究代表者

田中 陽子（Tanaka, Yoko）

畿央大学・健康科学部・准教授

研究者番号：60448727

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：在宅重症心身障害児における愛着支援モデルの構築は、半構成的面接を実施し質的帰納的分析より69項目を作成した。支援モデルの内容妥当性および表面妥当性は、重症心身障害児と家族の愛着形成支援に詳しい専門家14名（訪問看護師、医師、小児看護、在宅看護、地域看護領域の大学教員）を対象に無記名自記式質問紙調査を実施した。愛着支援モデルの信頼性・妥当性の検討は、全国の訪問看護ステーション小児対応可能事業所1581か所の在宅小児訪問看護を3か月以内に経験している看護師を対象に無記名web質問紙調査を行った。愛着形成に焦点をあてた在宅支援モデルであることを確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

地域在宅ケアにおいては、重症心身障害児および医療的ケア児の家族への支援が重要である。そのためには、子どもと家族の愛着形成に焦点をあてストレンクスについて支援ニーズの情報を収集しアセスメントを実践することが必要であるが、現状ではそれらを把握する方法が開発されていないとはいえず、本研究のテーマは学術的に重要である。本研究では、ストレンクス理論を基盤とし、在宅小児ケアが必要な障害児とその家族の愛着形成に焦点をあてて、在宅小児ケアにおける支援ニーズの検証し、独創性の高い研究である。開発された在宅小児愛着形成支援モデルの活用は、地域在宅ケアの発展に寄与するものであると考える。

研究成果の概要（英文）：For constructing an attachment support model for children with severe physical and mental disabilities at home, 69 items were prepared from qualitative inductive analysis by conducting semi-structured interviews. These experts were knowledgeable about attachment formation support for children with severe physical and mental disabilities and their families. Our goal was to determine the support model's content and surface validity. We conducted an anonymous web-based questionnaire survey of nurses with experience in home-visit pediatric nursing at 1,581 home-visit nursing stations nationwide within 3 months to examine the reliability and validity of the scale. These results confirmed that the 11 items and two subscales of the attachment formation support model developed in this study have a certain degree of reliability and validity as support models.

研究分野：母子保健

キーワード：愛着形成支援 重症心身障害児 医療的ケア児 地域在宅ケア 母子保健 尺度開発 愛着 ストレンクスモデル

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

近年、医療が在宅中心に大きく転換する中で、医療ケアを必要とする子どもが、家族の一員として家庭で生活することが可能になっている。重症心身障害児の医療的ケア児の実態調査(田村, 2017)によると、医学の進歩を背景として、NICU等に長期入院した後、医療的ケアが日常的に必要な医療的ケア児は、約 1.7 万人が在宅で生活をしている。その子どもの特性には、軽度発達障害の発生、育てにくい等の他に、呼吸器や脳における障害の残存があるために、退院時には呼吸管理や栄養管理等の医療的ケアを必要とする子どもが多くいる。子どもの成長発達には多くの課題があり、長い年月に渡り医療的、福祉的、教育的な支援が必要とされている。重症心身障害児とその家族の在宅療養に関する研究では、在宅療養に向けた具体的な連携の報告はあるものの愛着形成の支援については焦点が当てられていない。重症心身障害児は動けない喋れないうえに、知的障害や認知発達の遅れを持ち、愛着形成過程が健常児と比較して遅れていくと報告されている。その家族は子どもの障害の受容と、愛着が形成されていくことで受け入れの基盤を築いていく。ストレングスモデルは、その人が、元来持っている強さ・力に着目して、それを引き出し、活用していくケースマネジメントの理論・実践の体系である(C.A.Rapp,2006)。医療的なケアが必要な子どもと家族の愛着形成に焦点をあてたストレングスについて支援ニーズの情報を収集しアセスメントより看護職は、より個別性の高い在宅支援を提供し、実践能力の向上に繋がることを期待された。

2. 研究の目的

本研究では、国内の医療的なケアが必要な子どもと家族の在宅療養への支援として、ストレングス理論を基盤とし、在宅小児ケアが必要な障害児とその家族の愛着形成に焦点をあてて在宅小児ケアにおける支援ニーズの検証し、ストレングス理論に基づき愛着形成に焦点をあてた在宅支援モデル構築を目的とする。

3. 研究の方法

愛着形成に焦点をあてた在宅支援モデルは以下の手順で開発した。1年目(2018年度)は、在宅療養を行っている重症心身障害児の養育者10名を対象に半構成的面接を実施した。インタビューは計2回実施し1回目は子どもを妊娠してか現在までの子育て経験2回目は1回目のインタビュー内容に基づき愛着形成について質問を行った。過去の体験への語はライフラインメソッド(Brammer,1992)により縦軸を主観的な心情、横軸を時間の流れとして図示する方法を活用した。データの分析方法としては経験のプロセスを可視化して、その多様性と経路を捉える複線径路・等至性モデル(Trajectory Equifinal Model:以下、TEM)を用いた。2年目(2019年度)は、研究協力に同意が得られた重症心身障害児をケアする9名の訪問看護師を対象に、愛着形成への支援について半構成的面接を実施した。インタビュー内容は逐語録を作成した。ストレングスの視点を基盤とした支援に関する内容を抽出しコードを作成し、ストレングスモデルの4つのカテゴリー〔個人の性格・性質〕〔才能・技能〕〔環境のストレングス〕〔関心と願望〕に分類した。分析にはMAXQDAを用いた。3年目(2020年度)は、重症心身障害児と家族の愛着形成支援に詳しい専門家14名(訪問看護師、医師、小児看護、在宅看護、地域看護領域の大学教員)を対象に無記名自記式質問紙調査を実施し項目の内容妥当性および表面妥当性を検討した。4年目(2021年度)は、全国の訪問看護ステーション名簿で小児対応可能事業所1581か所の在宅小児訪問看護を3か月以内に経験している看護師を対象に無記名web質問紙調査を行った。再テストについては同様の対象に無記名web質問紙調査を3週間後に依頼した。調査内容は、個人属性、尺度原案修正案、基準関連妥当性の

外部基準尺度、Relationl Coordination 尺度、コミュニケーションスキル尺度、Utrecht Work Engagement Scale; UWES 日本版であった。5 年目(2022 年度)にかけてデータ収集および愛着形成に焦点をあてた在宅支援モデルの分析を行い信頼性・妥当性の検証を行った。

4. 研究成果

(1) 養育者のインタビュー調査結果

主な養育者は母親であり、年齢は 30 代 2 名、40 代 6 名、50 代 2 名で、子どもの年齢は 11 か月から 18 歳であった。重症心身障害児 10 名中 5 名が医療的ケア児であった。ライフラインの主観的な心情パターンは、主産後および障害告知後に低下し、地域における療育やリハビリの開始後に上昇している傾向が示された愛着形成過程の 1 期は出産後の長い入院生活の中で子どもと自由にかかわれない時期、2 期は退院し療育が始まり子どもの気持ちが読み取れるようになる時期、3 期は地域とつながることにより子どもと地域の友達の間には絆を感じるであった。必須通過点は「子どもの障がいを知られる」「母親以外の人との人間関係の構築」であった。分岐点は「子どもが音や声に反応してくれる」「退院後、地域でリハビリや療育が始まる」「地域の子どもたちとつながりができる」であった。重症心身障害児の家族は、出産後の障害告知、再入院により主観的な心情が不安定になることが示された。子どもとかわる機会、周囲のサポートや地域の親子交流は、愛着形成を促進させることが確認された。周囲の偏見、社会資源の調整不足、医療的ケアの負担感についての家族の思いに気づくことで、より適切な愛着形成過程の支援につながることが明らかになった。

(2) 訪問看護師のインタビュー調査結果

訪問看護師の愛着形成に焦点をあてた在宅支援内容で共通していたコードについて述べる。〔個人の性格・性質〕では、愛着形成につながる母親のかかわりを知る 愛着形成が順調か確認する 母親の気持ちの余裕について察する、〔才能・技能〕では、子どもの気持ちの伝え方を察知する 病気や障害によって起こっていることを把握する 母親ができていないケアを把握する、〔環境のストレングス〕では、家族のサポート状況を把握する 地域の社会資源情報を把握する、〔関心と願望〕では、母親の希望を理解する などのコードが抽出された。訪問看護師は、重症心身障害児とその家族の個人のストレングスと環境のストレングスを生活の場で相互作用させ、その相互作用によってストレングスを高め、本人が生活していく場として地域が持つ力を高める個別性の高い在宅支援モデルを構築していた。

(3) 愛着形成に焦点をあてた在宅支援モデルの内容妥当性・表面妥当性

内容妥当性指数(Content validity Index)を算出した結果、69 項目から 56 項目に修正した。I-CVI が 0.8 未満の 3 項目を除外し、意味内容の類似する 10 項目計 13 項目を除外した。その後、グループフォーカスインタビューの意見より 12 項目を除外した 44 項目とした。専門家の意見により、訪問看護師が愛着形成支援のアセスメントと支援内容を可視化することができた。この尺度は、地域で暮らす重症心身障害児とその家族の愛着形成に困難感を抱えている親への支援に役立てられることが示唆された。

(4) 愛着形成に焦点をあてた在宅支援モデルの妥当性・信頼性

1 回目の回答は 222 名、再テストは 88 名であった。訪問看護師の年齢 45.6 ± 9.1 歳、看護師経験年数 20.8 ± 9.5 年、訪問看護師経験年数 9.1 ± 7.1 年であった。44 項目より、2 回目 I-CVI より 18 項目、統計的分析の天井効果より 1 項目を除外した。探索的因子分析で 11 項目 2 下位概念が抽出された。2 下位概念は「家族アセスメント」「愛着支援」と命名した(累積寄与率 55.9%)。信頼性の検討の結果、本尺度の Cronbach's 係数は、0.9 であった。ICC は、

0.8～0.9であった。妥当性の検討の結果、本尺度の各下位概念は、外部基準下位概念と有意な相関を認めた。確認的因子分析により、愛着形成支援尺度2因子11項目の仮説モデルの適合度指標は、GFI = 0.907、RMSEA = 0.092が確認された。内的一貫性と安定性、基準関連妥当性と構成概念妥当性の結果から、一定の信頼性、妥当性を備えた愛着形成に焦点をあてた在宅支援モデルであることを確認した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Yoko Tanaka , Ayu Kono
2. 発表標題 Content validity of a rating scale for assessing the support needs of home caregivers who are having difficulty establishing attachment relationships with children with severe physical and mental disabilities
3. 学会等名 The 7th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (7th WANS) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中 陽子
2. 発表標題 重症心身障がい児とその家族の 愛着形成支援評価尺度 に関する内容妥当性の検討
3. 学会等名 第11回日本公衆衛生看護学会学術集会（仙台）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中陽子 , 河野あゆみ
2. 発表標題 在宅重症心身障害児とその家族への愛着形成支援尺度の開発
3. 学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会(広島)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中陽子 , 河野あゆみ
2. 発表標題 重症心身障害児とその家族の愛着形成過程における影響要因の検討
3. 学会等名 第41回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 YokoTanaka , AyumiKono
2. 発表標題 Trajectory Equifinality Approach to characterize the process of attachment formation between severely handicapped children and their mothers
3. 学会等名 6th International Conference of Global Network of Public Health Nursing (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中陽子 , 河野あゆみ .
2. 発表標題 重症心身障害児とその家族の愛着形成過程における支援ニーズの検討
3. 学会等名 第40回日本看護科学学会学術集会 東京
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中陽子 , 河野あゆみ .
2. 発表標題 愛着形成に焦点をあてた重症心身障害児とその家族への在宅支援の検討
3. 学会等名 日本地域看護学会第23回学術集会 大阪
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 YokoTanaka , AyumiKono ,
2. 発表標題 Home support of visiting nurses focusing on attachment formation in children with severe physical and intellectual disabilities
3. 学会等名 EAFONS , Chiang Mai (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 YokoTanaka , AyumiKono,SatokoOkawa
2. 発表標題 Home support of visiting nurses focusing on attachment formation in children with severe physical and intellectual disabilities
3. 学会等名 EAFONS , 10-11 January 2020 , Chiang Mai, Thailand (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

優秀演題抄録受賞（公益社団法人日本看護科学学会） テーマ：重症心身障害児とその家族の愛着形成過程における影響要因の検討
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------